不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室指導について

不登校生徒の状況

小学校から不登校傾向の場合、中学校入学後２、３週間は頑張って登校し学級にも入れていたが、体力的にも続かず週１日程度の登校となった。また別の生徒では、１学期末までは、登校することができていたが、集団に入ることへの不安感もあり、現在は週１日程度の登校となっている。

具体的な取組

週に２日午前中、３名のボランティアの方に御協力いただき、別室指導を行っている。来室している時は、担任や学年の教員も当該生徒とのコミュニケーションをとるようにしている。また、生徒の様子を記録し、教員に共有している。

体力的な面もあり、週１日程度、活用する生徒がいる時は、ボードゲーム等を通したボランティアの方とのコミュニケーション、他の生徒との交流、そして、ボランティアの方が見守りの中、ワークシートや授業用プリントの学習を行って過ごしている。

週２日程度、活用する場合の取組としては、ボードゲームなどを通して、ボランティアの方とのコミュニケーション、他の生徒との交流、そして、ボランティアの方とワークシートや授業用プリントの学習、美術などの実技教科の課題に取り組みながら過ごしている。

教職員とボランティアの方とのコミュニケーションも大切にしている。記録していただいたことに対して、丁寧にコメントしたり、どのような関り方で、どのような変化があったかを聞いたりしながら、やりがいをもって取り組んでいただけるように心がけている。そのような中、生徒との人間関係も深まりつつある。

成果

別室登校を通して、登校日数が増えた。また、学習支援を受けることで、学習の遅れを軽減することができた。そして、ボランティアの方とコミュニケーションをとっていく中で、明るい表情が多く見られるようになった。

課題

校内別室の利用を通して登校日数は増えた。今後、より学びの機会が広げられるよう支援の在り方を検討していく。

不登校児童・生徒支援事例報告書

生徒が別室登校するメリットについて

不登校児童・生徒の状況

小学生の時に不登校を経験した生徒は、別室を活用した学習により登校へのモチベーションを保っている。学習が理由のため登校意欲が低下した生徒は、別室で個別に学習することで登校意欲を持続している。集団生活が苦手で不登校を経験した生徒は、別室で学習する場を設けることで、毎日登校を続けることができている。

具体的な取組

【定期考査に向けた学習支援】

当該生徒は、教室に入りにくいと思っていても、学習意欲が低くないケースがある。そのような生徒に対して、定期考査に向けた学習の方法を教えた。具体的には英単語や歴史の覚え方や関数や証明の解き方などを教えることを通して学びなおしの時間とすることができた。

【進路学習】

将来の夢や世の中の職業などの話をする中で、当該生徒が将来どのような職業に就きたいのか知ることができた。その夢を実現するためにどのような進路の選択があるのかを伝えることを通して、自らの役割の価値や社会と自分との関係性を見出すきっかけを作ることができた。

【進学指導】

高校進学を控え、受験のための面接練習を行った。何度も繰り返して練習した結果、自信をもって面接に臨むことができ、第一志望校に合格することができた。

【自己肯定感・自尊感情を高める活動】

一人ひとりの生徒に対して寄り添い、思いを丁寧に傾聴することを通して、人間関係を構築した。当該生徒の話を受け止め、気持ちや状況を十分に理解することで、生徒の自尊感情や自己肯定感を高めるきっかけを作ることができた。

成果

本校では様々な事情により不登校を経験した生徒や不登校傾向のある生徒等の支援を行った。個別対応や少人数による指導等により、時間をかけてじっくりと生徒と向き合うことを通して、以前にも増して生徒の登校意欲を高めることができた。

課題

①いかに生徒と支援員を結びつけられるか。

②年間を通した支援員の安定した人材確保。

不登校児童・生徒支援事例報告書

不登校児童や不登校傾向のある児童の対応について

不登校児童・生徒の状況

小学校に入学する以前から登校への課題を抱えていた児童や課題を抱えて転入してきた児童を含め、様々な背景・要因をもつ不登校児童がいる。中には、集団生活に馴染めない、授業中にじっとしていられない児童もおり、そのような児童は、学級集団から離れていき不登校になる傾向があるので、組織的に対応をしている。

具体的な取組

アセスメントに重点を置きケース会議を開いた。そこでは、情報を収集・分析・共有し、チーム支援や保護者との連携を進めた。また、どの教員も同じような関わり方で児童と接することができるようにした。保護者には区の教育相談等を紹介し、その結果を共有した。その結果、徐々にではあるが登校できる日が増えてきた児童もいる。

校内委員会を開き、児童本人の特性を理解して上で、対応を考えた。

担任が保護者や児童本人と対話を重ねたり、スクールソーシャルワーカー等と繋いで本人に寄り添った対応を続けたりした。保護者も自宅での児童との対応に悩んでいたが、対応を続けることで徐々に落ち着きを取り戻され、児童も登校できる日が増えてきた。

集団活動に馴染めないが、学習には取り組める児童もいる。担任と養護教諭が連携し、保健室で学習に取り組んだり、読書したりしている。保護者とも連携し、この対応について共通理解をしている。このような対応をすることにより、不安になると保健室に行くことができるという安心感が児童にでき、教室でも落ち着いて過ごせるようになった。

ケース会議を開いて、学年で同じような声かけや対応ができるようにした。管理職・担任が保護者に連絡をして、対応について相談したり、共有したりした。落ち着いて部屋で過ごせない時は、通常学級支援員にもついてもらい、児童の安全を見守っている。部屋で過ごせる時は、タブレット端末を使って学んだり、本を読んだりして過ごしている。

成果

・チームで対応していくことによって、どの教員も同じ対応ができ、児童の心の安定感につながった。
・居場所を作ることで、安心感をもって過ごせる児童が増え、不登校の未然防止を図ることができた。

課題

・ボランティアの人材を確保することが難しい。
・児童一人ひとりの状況や不登校の原因が違うので、対応が多岐にわたる。

不登校児童・生徒支援事例報告書

登校支援別室開設について

不登校児童の状況

・登校時刻を過ぎるため保護者が一緒に登校する児童がいる。
・教室に直行することができず、校内別室で支援員と過ごし、好きな授業や給食のタイミングで教室に行く児童がいる。
・どの児童も校内別室で過ごした後、児童自身が教室で過ごすことを選択できている。

具体的な取組

SC:スクールカウンセラー、SSW:スクールソーシャルワーカー

ボランティア配置の工夫

支援事業終了後も持続可能な支援になるように、白百合女子大学と連携し、発達心理学専攻の学生の実習を行うことにした。２名ずつ５回の実習を４グループで 10 月～3 月までを期間として予定している。

校内別室の場所選定

SC の来校日は週に 2 日で、教育相談室を校内別室として活用する。ボランティア２名のうち１名を配置し、もう１名を教室に配置している。指定した教室の児童の対応を行い、どのような状況で、児童がクールダウンを必要とするのかを把握している。

SC・SSW との繋がり

校内別室の開設について、SC･SSW から、不登校児童とその保護者に話をしてもらい、学校登校への興味・関心の様子を伺っている。場合によっては、SSW も一緒に過ごすことも想定している。

児童のクールダウンの場

不登校ではないが、教室で過ごしている中で、気持ちがイライラしてしまい、みんなと一緒に授業に取り組むことができない児童がいた場合、担任が対応しきれない状況になることがある。そのような児童が過ごす場所として、別室で過ごすことを選択肢として提案している。

成果

・大学と連携できたことにより、子供たちにも関わりやすい学生であったことがスムーズな開設につながった。
・子供のそばに人がいることで、子供も安心して学校で過ごすことができている。

課題

・大学での授業があるため、時間が午前中で、毎日の開設にはならないこと。
・人数が増えたときに、部屋が手狭であること。

不登校児童・生徒支援事例報告書

生徒の居場所つくりのための校内別室運営について

不登校児童・生徒の状況

不登校生徒の中には、過去の出来事がトラウマになり、なかなか教室で過ごすことができない場合がある。例えば、転校しても、学校の教室という空間が同じことから、フラッシュバックする場合もある。教室とは違う、安心感のもてる環境を工夫することで、登校習慣が身に付く生徒がいることを踏まえて、手だてを工夫している。

具体的な取組

〇校内別室の組織的運営に向けて
・新たに「教育相談部」を設置
　→各学年・特別支援教室の教員を割り当て、校内で組織的に対応
・校内別室の運営方法の共通理解
・対象生徒の支援計画の作成
・生徒対応等についての研修
・週一度の情報共有の場の設定

〇校内別室の環境整備
・安心して学校生活を送るための空間づくり
　→ソファ等を置き、リラックスできる空間の準備・必要に応じたパーテーション等の設置
・生徒の生活スタイルに合わせた対応
　→登下校時間や別室までの導線の配慮
・別室内での学年を越えた交友関係の構築

〇学習ついて
・担任や各教科担当教員による定期的な巡回
・ALT による英会話等の対応
・オンラインによる授業参加
・学校図書館の司書の支援
・地域ボランティアや大学生による支援
・キャリア教育に関する講演会の開催

〇その他
・スクールカウンセラーとの定期的な面談
・スクールソーシャルワーカーとの連携
・定期考査における別室対応

成果

別室を設置してから、登校できる日が格段に増え、安心して学校生活を送っている。最近では、学級に戻って授業に参加することも多くなり、友達と良好な関係を築いている。他の不登校生徒の別室登校も増加傾向にあり別室の意義を強く感じている。

課題

別室の運営について、現在はボランティアや大学生に協力を仰いでいるが、人員の確保が流動的であり大きな課題となっている。

不登校児童・生徒支援事例報告書

個別対応教室について

不登校児童・生徒の状況

学校に行けず、支援が必要な生徒だけでなく、自分で学校に行かないことを選択した生徒など、様々な要因や背景をもつ生徒が在籍している。支援が必要な生徒に対しては、担任や関わりのある教職員が、生徒やその保護者と連絡を取り合い、願いを丁寧に受け止めている。校内委員会を中心とした組織的な対応や外部機関との連携をとりながら、生徒一人ひとりに最適な学びの場を模索している。

具体的な取組

SC:スクールカウンセラー、CDN：コーディネーター

事例１《生活リズム構築の場として》

入学後不登校であった生徒だが、今年度に入り SC と関わりをもてるようになった。2 学期からは週 1 回の SC 面談後、本教室に登室できるよう、SC・担任・学年教員が連携し、登室をコーディネートした。１時間程度の在室から開始し、現在では給食をとれるまでになった。

事例２《登校意欲を刺激する場として》

入学後 1 学期は登校していたが、2 学期になり、登校に価値を見いだせなくなった生徒に対しては、特別支援 CDN・担任・学年教員・スクールソーシャルワーカー・小学校時代の校内別室指導支援員が連携し、本教室への定期登室を支援したことで数回登室することができた。

事例３《自信を取り戻す場として》

どうしても教室に入れない、けれども進路実現のために勉強はしたい。この思いを叶えるために、環境調整の一環としてブースに机を購入した。周囲から見えないことで安心できた様子だった。担任・学年教員らと対話する中で、本人が教室で過ごすことを希望した。現在は、通常登校をしている。

事例４《リラックスできる場として》

集団生活に疲れやすい生徒もいる。登校渋りが見られた段階で、特別支援 CDN・担任・学年教員が連携し、校内別室の入室を提案した。毎日登室し、自分のペースで学習や運動を継続できている。

成果

適応指導教室通室が難しい生徒や、適応指導教室と併用したい生徒の居場所の選択肢が広がったという点で、校内に個別対応教室が開設された意義は大きい。また学校生活に不安をもつ生徒にとって、校内に居場所があると思えるだけでも安心材料である。

課題

①ボランティアの配置であるため、学習権の保障という面では万全ではない点。

②ボランティア確保が困難である点。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室運営について

不登校児童・生徒の状況

不登校の要因は一人ひとり様々である。例えば、中学校生活が自分の人生において、どのような位置付けになるのかが不明ということで、登校する価値がないとの考えから、不登校になる場合もある。そのため、保護者等と無理に登校刺激を加えるのではなく、対象生徒の意思を尊重する支援の姿勢が重要である。

具体的な取組

管理職、教育相談コーディネーター、不登校対応加配教員、養護教諭、学年主任、担任教諭で構成される校内委員会において、生徒の状況、成育歴、家庭環境等のアセスメントを図り、チーム支援に該当することを確認する。チーム支援のための情報収集と分析、共有を行い、支援の中心に校内別室での対応を考える。

校内別室を利用させ、コミュニケーション能力の向上と個別による学習支援を行う。常駐スタッフと大学生ボランティアが担当となり、一日の過ごし方を自らが作成していくプログラムで対応する。

個別の学習支援のみならず、校内別室を利用する他の生徒とともに球技等のレクリエーションや調理実習を行う。

常駐スタッフや大学生ボランティアによるアサーショントレーニングの実践やスクールカウンセラーによる定期的なカウンセリングを実践することにより、徐々に心を開き、他の生徒との関わりを求めてくるようになる。一人で学習をする時間と他の生徒と一緒に過ごす時間をバランスよく設定した。

校内別室を利用しはじめた当初は、週２日ほどの登校であったが、自分で定めた時間に毎日登校できるようになった。所属する学級の生徒とも休み時間等にコミュニケーションをとれるようになり、修学旅行にも参加し、その後学級で学ぶこともできている。

成果

校内別室において、居場所づくりだけにとどまらずに学力向上やアサーショントレーニング等のコミュニケーション力向上を目指した結果、教室での学びを選ぶようにもなった。不登校加配教員を中心に見守る体制を組んでいる。

課題

校内別室を運営するにあたり、専門的知識をもった人員を常時確保することが最大の課題となる。

不登校児童・生徒支援事例報告書

別室居場所づくりと生徒支援について

不登校児童・生徒の状況

小学校の時から不登校傾向がみられる場合、学習の遅れや友人関係のトラブル等、さまざまな要因から学校に通えなっていることが多く、全体的に集団生活への苦手意識が見られる。また、突然の大きな音、たくさんの話し声、急な授業変更等など教室での不安やストレスを抱えやすく、それを伝えたり相談したりすることは難しい。

具体的な取組

【別室における居場所づくり】

生徒を温かい雰囲気で迎えることができ、生徒の状況に応じた支援が可能であり、生徒の不安がしずまって落ち着ける場所。そうした条件を満たす場所づくりを、教職員全員で行った。保健室のソファーとぬいぐるみを運び、旧パソコン室及び旧パソコン準備室を整備した。

【入学前の事前準備】

４月に生徒、保護者と面談し、生徒の抱えている不安や保護者の心配事等の聞き取り後、校内の見学会を行うこともある。所属クラス以外にも居場所があり、学校が安心できる場であることを、生徒、保護者と共有する。

【校内校外体制の整備】

別室登校支援コーディネーターを中心とした校内支援員の確認。加えて、スクールソーシャルワーカー、巡回心理士、スクールサポーター、学校医等の外部機関との情報共有を行った。多角的なアセスメントの実現にむけて、定例会と、必要に応じたケース会議を行った。

【個別出席簿の活用】

登校状態を可視化できるよう、個別出席簿を使用している。生徒の登校意欲の向上に加え、生徒の出席状況を教職員全体で把握している。加えて、アセスメントの３つの観点を踏まえて、ガイドブックの「アセスメントの項目」を校内支援会議で活用し、生徒理解に努めている。

成果

遅刻をしても登校する頻度が高まった生徒もいる。所属クラス以外の居場所に安心感をもって登校する気持ちをもたせることができた。

課題

校内別室のみに落ち着いてしまうことなく、少しでも所属クラスに気持ちを向けさせ、交流の場をつくっていけるよう検討する。

不登校児童・生徒支援事例報告書

不登校加配教員と校内別室の運用について

不登校児童・生徒の状況

小学校から不登校の状況が継続していたが、本校入学後に校内別室登校ができるようになり、徐々に登校習慣が身に付き、ほぼ毎日、登校できるようになった生徒がいる。教室以外にも、過ごすことのできる場所の選択肢があることで、登校できるようになる生徒がいる状況を学校全体で共有している。

具体的な取組

校内別室には不登校対応加配教員やボランティアの大人が見守りの位置付けで常駐し、不登校傾向の生徒が登校した時に支援をし、過ごしやすい環境を作っている。

（写真は生徒不在時の様子）

校内別室を利用する生徒についての情報は不登校対応加配教員、担任、各学年教育相談担当、スクールカウンセラー、生活指導担当、養護教諭、管理職、ボランティア等を含む教育相談部会を毎週水曜日に開催し、共通理解を図り、個々に応じて最適な対応ができるように調整している。

特別な配慮を要する生徒もおり、不登校対応加配教員は特別支援教室専門員、特別支援教室巡回教員とも連携して支援を行っている。保護者とも情報交換を密に行い、生徒の状況把握と適切な登校支援の具体策について随時相談して対応している。

体育祭、合唱祭等の学校行事を中心に保護者同伴のもとでの参観を促して通常の学級への登校刺激となるように配慮している。

担任が当該生徒の登校する時間に合わせて直接コミュニケーションをとることができるように、不登校対応加配教員が担任の通常業務との調整を行っている。

成果

小学校低学年より不登校の状況が継続していたが、本校入学後に校内別室登校ができるようになった生徒がいる。また、学校における組織対応によって、引きこもり状況から、登校できるようになった生徒がいる。

課題

校内別室ボランティアの人員確保など、人的な支援をより厚くできるように調整する必要がある。